Dungeons＆Takafumis＆CLANNADs

傾世催眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｕｎｇｅｏｎｓ＆Ｔａｋａｆｕｍｉｓ＆ＣＬＡＮＮＡＤｓ

【Ｎコード】
Ｎ１４６０Ｉ

【作者名】
傾世催眠

【あらすじ】
行方不明となった鷹文０５４番の捜索に出た朋也達は、そこで鷹文を巡る様々な人間や獣人達の思惑や、より大きな陰謀に巻き込まれ、関わる事になってゆく。
はたして、鷹文０５４番は何処に消えたのか！？
そして、朋也達の運命や如何に！？
智代アフターのおまけゲームのオールスターバージョンです。
剣と魔法なＣＬＡＮＮＡＤを、お楽しみ下さいｗ

ファンタジーっぽい杏仁豆腐（前書き）

鷹文登場＆Ｌｉｇｈｔ　ｃｏｌｏｒｓ原作時間軸突入記念作品です。

※春原・渚のデータを一部修正しました
※サブタイトルを変更しました
※０５４番の０が抜けていたのを直しました

ファンタジーっぽい杏仁豆腐

ここは剣と魔法の国クラナド連邦。
長きに亘る獣人達との戦いを制し平和を勝ち得たこの国は、魔術師達により生み出された感情を持ったクローン“鷹文”の普及により、かつてない繁栄を遂げていた。
しかしある嵐の晩、その繁栄の基盤を根底から揺るがす大事件が起こる。
鷹文を培養する為の唯一の触媒と成り得る、“０５４番”が突如行方をくらませたのだ。
無論、魔術師達と鷹文達は懸命に０５４番を捜索した。
だが、かつての勢いは衰えたとは言え、一歩町の外に出れば獰猛な野良獣人達と遭遇する事も珍しくは無い危険な世界である。
頭デッカチで非力な魔術師達と、原則一人一つの感情しか持っていない為に闘争心の無い鷹文のクローン達では、とても太刀打ち出来る相手では無い。
そこで魔術師達はおふれを出し、大陸全土から腕に覚えのある猛者達を集め、捜索隊を組織した。
この物語は、鷹文を巡る人々の笑いと涙と感動の一大叙事詩である。

Ｄｎｕｇｅｏｎｓ＆Ｔａｋａｆｕｍｉｓ＆ＣＬＡＮＮＡＤｓ

俺は岡崎朋也。
これでも地元じゃちったあ名の知れた剣士だ。

ステータスはこんな感じ。

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙
ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット＆作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・？？？（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※１、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※２、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※３、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

剣士なのに槍使いかよって突っ込みは無しだ。
まあ、俺にも色々と事情があるんでな。
多額の賞金に釣られた俺は、昔からの相棒である春原、

☆春原陽平／盗賊
通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／Ｉｎｔ０／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ

武器・新調した剣（ネタバレなのでここでは内緒）？？？
・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）E
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）E
アクセ・Hな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵のターゲットになりやすい。味方からもなりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

親御さんに頼まれ一緒に連れて行く事になったパン屋の娘で……
「ちょっと待てよ！！」
「なんだよ？人が折角読者の為に説明してるって時に……」
「読者って誰だよ！？それよか、僕のＩｎｔがＯ（オー）何だけど、おかしくないですか！？五段階評価じゃないの！？」
「良く見ろ。Ｏ（オー）じゃなくて０（ゼロ）だ。それと、敬語になってるからな」
「なんだゼロかあ……ってゼロ！？Ｉｎｔゼロってなんだよ！？」
「原則五段階だが、何事にも例外はあるんだよ。てか、お前Ｉｎｔの意味わかって言ってるのか？」
「しらねえよ！！」
“インド人ぽさ”だ！」
「インド人ぽさぁ！？」
「そうだ！カレーが好きとか、ヨガをやってるとか、ターバン巻いてるとか」
「僕カレーは好きだけど」
「ちっ……」
「なんですかその舌打ちは！？てか、カレーの嫌いな日本人なん

ていねえよ！！」
「確かにカレー嫌いって奴は珍しいが、ここは日本じゃなくて“クラナド連邦”だからな。仕方ねえ。じゃあ、お前のＩｎｔはＺにしといてやるよ」
「Ｚ！？２５段階中最低かよ！！」
いや、アルファベットは２６文字だからな。
「いいじゃねえか。Ｚって何かカッコよさ気だし、お前にピッタリだと思うぜ！」
「た、確かに……！」
「よし、決まりな」
ＺＥＲＯのＺと言う意味合いなのだが、面倒なので黙っておこう。
話を戻すが、パン屋の娘でこれが初めてのミッションだと言う古川、

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

そして、何度か同じミッションをこなして顔馴染みになった杏、
☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ

武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）C
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）B
防具・鎖帷子&忍装束（軽さを重視したいかにも忍者らしい服）C
特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

四人一組でとの依頼元からの条件があったので、今回はこの四人でパーティーを組む事になった。
まあ、探索が主な任務だから、あまり大人数で固まっても効率的じゃないし、獣人達を刺激するだけと偵察に出かけた杏も言っていたから、そういう事なのだろう。
「あの……」
それまでほとんど喋らず俺たちの後ろを付いてきていた、ローブにトンガリ帽を被ったいかにも魔法使いな古河が不意に口を開いたので、俺と春原は同時に振り返る。
「本当に私なんかが一緒で良かったんでしょうか？新米の駆け出し魔法使いですし、皆さんの足手まといになるんじゃ……？」
「そんな事、気にする事ないよ渚ちゃん。誰だって最初は初心者ってね」
「お前が初心者だって事は承知の上でパーティに入れたんだからな。別に獣人達の拠点を潰せってんじゃないんだ。そんなに危険な任務にはならないだろ」
「そうそう。まっ、獣人達が襲ってきても、その時はこの僕が渚ちゃんを守ってあげるからね！」
「いいわねえ、あんた達は能天気で」
上からそんな呆れた声がしたので側にあった樹の上を見上げると、そこには忍装束の髪の長い少女が枝の上に立っていた。

こいつが最後の一人、腕利きの忍者の杏だ。
確か藤林流とか言う由緒正しいとこの忍者で、既に何人ものファンクラブ……いや、配下が居て、今回も裏でそいつらを動かし色々調べているらしい。
「拠点を潰す必要は無くても、潜入くらいはする羽目になるかもしれないわよ？」
「何だよ？探索だけの楽な仕事だっつったのは、お前だろ？」
「楽なんて言ってないわよ！情報収集だって時には危ない橋を渡る必要だってあるし、もし鷹文が獣人達に捕まっているとしたら、潜入して確かめるくらいの事はしないとでしょ？あんた達が探索任務をなめてるだけよ。それに今回の件は何かキナ臭いにおいがするしね」
「キナ臭い？何か掴んだんだのか？」
「生憎まだ何も……でも、だからこそ妙な感じがするのよね。鷹文０５４番て言ったら、言わば魔術師達の金の成る木でしょ？何者かにさらわれたにしろ、自力で逃げたにしろ、そんな簡単に、誰にもみつからず城や町の外になんて行ける物なのかしら？」
「えっと……何が言いたいの？」
ＩｎｔＺには難しかった様だ。
「今回の事件には、何か裏があるかもしれないと言う事じゃないでしょうか？」
「そういう事ね」
「でも、あくまでそれはお前の憶測だろ？仕事を引き受けた以上、俺達は依頼をこなすしかねえんじゃねえか？」
「あんたそういう所シビアよねえ。まあ、あんまり浮かれていると痛い目みるかもよって話よ」
「あの……本当に私何かが一緒でいいんでしょうか？みなさんにご迷惑をかけてしまうんじゃ……？」
古川は益々不安そうに先程と同じ事を訊いて来る。
杏の話もわかるが、春原はともかく俺は浮かれていた訳では無い

のだが。
「あんたも今更そんな事言わない！そんなんじゃ、いざ敵と遭遇した時にオロオロして何も出来ないわよ」
「は、はい。すみませんです……」
「ほら、そこで謝らないの！初めてのミッションで不安なのはわかるけど、だからってここまで来て自分でいいのかなんて訊かれたら、あんたを選んだ私達の立つ瀬が無いじゃない！」
「は、はい。すみま……いえ、その……私は私に出来る事を精一杯頑張ります！」
「そう！それでいいのよ！期待してるわよ渚！」
何だかんだ言いながら、いつもの調子で元気づけちまった。
こういう所は本当に流石と言うか、俺には真似出来ないと言うか、つくづく伊達にこの若さで多くの配下を束ねて無いなと思う。
「で、早速だけど、この先の廃屋に何匹か獣人が居たけどどうする？」

杏の案内で廃屋についた俺達は、物陰から中の様子を探りながら作戦を練っていた。
廃屋は屋根の大半が倒壊しており、そこから中を覗う事は難しく無い。
「とりあえず、中には緑色の獣人が三匹か」
緑色の獣人とは、一番弱いとされている獣人の事だ。
「さっき見た時と、増えてはいないようね……」
「雑魚が三匹か！楽勝じゃん！僕一人でも勝てちゃうんじゃない？」
敵が弱いと見るや、調子に乗って春原がいつもの大口を叩く。
「じゃ、ここはお前に任せた」
「お手並み拝見ってトコね」

「春原さん、頑張って下さい！」
「えっと……一緒に戦ってくれませんか？」
自信有り気だったクセに途端にこれだ。
「まあ、渚の初陣にはうってつけの相手だし、他に援軍が居ないとも限ら無いから、皆で手早く片付けた方が無難よね。ああ、でも全員殺しちゃダメよ？情報を聞き出す事が目的なんだし」
「んじゃ、古河がいきなり魔法を中にぶっぱなして、敵がうろたえている間に三人で斬り込んで一人一匹づつ倒す作戦でいいか？」
「そうね。シンプルだけど、それが一番確実でしょうね。渚と陽平もそれでいいわね？」
「はいです！」
「フッ、このミッションの為に新調した剣の試し斬りには丁度いいんじゃないか」
また春原が調子に乗り始めた様だが、その春原の言葉にピクリと反応した杏は表情を険しくさせる。
「ちょっと……あんたまた何か変な武器買ってきたんじゃないでしょうね？この前使ってたの、太刀じゃなくて太刀魚だったじゃない！」
そういや、前回杏と共に戦った時、春原は魚の太刀魚を振り回していたんだっけか。
俺と杏の活躍で何とか勝てた物の、あの後も暫く春原は生臭くて仕方が無かった。
「字が似てて紛らわしかったんだよ！それにそれなりに戦えたからいいじゃんか！」
「てか、その太刀魚だって、お前が最初に買おうとしてたの秋刀魚だったからな！」
「魚のクセに、名前に刀って入ってるのがおかしいんだよ！！」
「そういう苦情は店か国に言え」
「ちょっと朋也！あんたその場に居たの？」
いきなり杏の矛先がこちらに向いた。

ヤバッ、今のはヤブヘビだったか……？
「居合わせたんなら、面白がってないでちゃんと陽平の面倒みなさいよ！」
「そうだよ！太刀なのに妙に安過ぎるから、僕もおかしいと思ったんだよ！」
「だったらその時に気付きなさいよ！まったくもう……それで、今回は大丈夫なんでしょうね？」
「フッ、任せてくれよ。今回はちゃんと有り金はたいて高くてカッコいいのを選んできたのさ！おかげで防具はろくなの買えなかったけどなあ！！」
「いや、そこはえばれるとこじゃないからな」
「だからそんな鎧だか何だかわからない物着てたのね……まあ、とりあえず見せてみなさいよ」
「ああ、言われなくても見せてやるさ！！見て驚くなよ！！」
「「「えええっ！！」」」
大き目の袋の中から春原が取り出した物を見て、俺や杏までもが思わず驚愕の声を上げた。
そう、確かにそれはとても気品があって格好良くて高そうだったからだ。
「どうだい？僕のシャムネーコは？」
気取って眼をつぶったまま差し出した物の感想を訊いてくる。
てか、今自分でシャムネーコつったよな？
まさか、これは狙ったボケなのか！？
だとしたら、つっこむのは癪だな！
いや、しかしこいつの事だからマジボケの可能性も有り得る。
どうする？つっこむべきか？つっこまざるべきか？
杏はというと、無言で頭を抱えていた。
「わあ、とっても可愛い猫さんです」
「フッ、そうだろ？僕のシャムネーコは可愛……可愛い猫？ええっ！？」

どうやらマジボケだったらしく、古河の素直な感想にようやく春原は驚いて目を見開き、自分が首根の後ろをつまんでる物を凝視する。

「猫だ！！剣じゃない！！」

「に〝ゃに〝ゃに〝ゃに〝ゃに〝ゃ〜〜〜〜〜！！」

春原が顔を近づけた瞬間、今度はそれに驚いた猫が春原に対して引っ掻きラッシュを発動させた！

「ギャァァァァァ！！」

シャムネーコは春原に３０のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原に２８のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原に３１のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原に３４のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原に２７のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原に３１のダメージを与えた！！

シャムネーコは春原を倒した！！

シャムネーコは逃げ出した！！

「あっ、猫さん！！……逃げて行ってしまいました……」

「最早どこからつっこんでいいのかわからねえよ……！！」

「とりあえず……買った時に猫か剣かぐらい気付きなさい！！」

「おい！！人間が居るぞ！！」

「しっまた！気付かれたわよ！」

どうやら今の騒ぎで敵に発見されちまったようだ。

しかも、何処に隠れていたのか、十を超える数の獣人達がゾロゾロと現れ、俺達を包囲し始める。

「地下に本格的な根城が在ったみたいね……迂闊だったわ……！」

「ど、どうしましょう……？」

「こいつはちとヤベエかもな……！」

楽勝ムードが一転、絶体絶命のピンチに陥った俺達の運命や如何に！？

つづく

ファンタジーっぽい杏仁豆腐（後書き）

この作品を書く為に、Ｄ＆Ｔを１０回以上クリアしました！（お

秘密基地っぽい杏仁豆腐

突如行方不明になった鷹文０５４番の探索依頼を請け負った俺、リガールドの赤い牙こと剣士岡崎、

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙
ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット&作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・???（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※1、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※2、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※3、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

リガールドの黄色い猿こと盗賊春原、

☆春原陽平／盗賊

通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＺ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ
武器・シャムネーコ（気品のある猫。逃走中）Ｄ
・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）Ｅ
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）Ｅ
アクセ・Ｈな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵の標的になりやすい。味方からもなりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

新米魔法使い古河、

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

腕利きの忍者杏、

☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ
武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）Ｃ
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）Ｂ
防具・鎖帷子＆忍装束（軽さを重視したいかにも忍者らしい服）Ｃ
特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

の四人は、襲撃して情報を聞き出すべく、少数の獣人達に奇襲をかけようとしていた。
だが、例によって春原のお陰で敵に見つかっちまった俺達は、逆にどこからか大量に現れた獣人達に周りを囲まれちまったんだ。
コイツはヤベーぜ！！
こっちは杏はともかく、初心者の古河と、ネコにやられちまった春原がいるんだぞオイッ！？
まっ、世の中なるようにしかならねえだろうけどな。

「ど、どうしましょう！？獣人さん達いっぱい隠れてました！！いったいどうしたら……事情を話せば、許してもらえないでしょうか？」
「アンタ達をぶっ倒して、情報を聞き出そうとしてましたって？バカな事言ってないで、いい加減覚悟を決めなさい！」
いきなり敵に囲まれパニくる古河を、杏が冷静にたしなめる。

まあ、初陣からこれじゃあな。
俺としても、まだ町からそう離れていないこんな場所で、これだけの数の獣人と出くわすとは思っていなかったから油断していた。
「で、マジでどうすんだ杏？」
「どうするって……やるしかないでしょ？“いつもの”ようにね」
「だよな……オラッ、起きろ春原」
いつまでも寝ている春原をゲシッと蹴っ飛ばして起こす。
「ゲフッ！！痛いじゃんか岡崎！！」
「いつまでも寝てっからだ」
「だからって、もっと優しくソフトに起こしてくれませんかね！？」
「ハイハイ、あんた達ももうちょっと緊張感持ちなさいよね！獣人に囲まれてんのよ？」
「え……？ひいっ！！何だよこれ！？いつの間にか僕達、獣人に囲まれてるじゃんか！！」
起きるや否やつっかかって来る春原に、杏が手を叩きながらたしなめ、それでようやく自分達が置かれている状況に気付いたらしく悲鳴をあげてうろたえる。
相変わらず状況判断能力に欠けている奴だ……いや、こいつの欠けている所を挙げていたら切りが無いが。
「だからそう言ってるでしょ……まったく、誰の所為だと思ってるのよ？」
「まあ、そんな訳だから、お前の力だけが頼りなんだ」
「どんな訳だよ！……って、え？僕だけが頼り？フッ、さすが岡崎、よくわかっているじゃないか！この『リガールドの黄色い猿』と謳われたこの僕に……って、何だよこの通り名！？」
折角煽ててやったってのに、余計な事に気がつきやがった。
「今更だなオイ……俺と同じリガールド出身なんだからいいだろ？」
「リガールドは別にいいよ！その後の黄色い猿って何だよ！？」

「頭が黄色ぃからだろ？」
「これは黄色じゃなくて金髪ですよ！！大体お前が『赤ぃ牙』で、どうして僕が『黄色ぃ猿』なんだよ！？」
「知るか！！そもそも通り名ってのは、誰かが勝手に付けるもんだろうが。文句は他に言え！」
「何だよそれぇ！？せめて『黄色い牙』とかにしてくれませんか！？」
「もう金髪はいいのな。じゃあ、『リガールドのイエローモンキー』でどうだ？どっかのバンド名ぽくて格好良さ気じゃねえ？」
「イエローモンキーだってぇ！？……いいかもしない！！」
「ああっ、もう！どうしてあんた達はすぐ漫才始めんのよ！？陽平！いいからとっとと行きなさい！！」
「へっ？どこに？」
「いいから行けやオラ！」
俺は春原の背後に回ると、押し出すようにケツを蹴っとばす。
「んべ！！何すんだよ岡崎！？って……ひいいいいいいいいいいいいい！！」
無様に頭から地面に倒れこんだ春原は、起き上がるなり俺に文句を言ってきたが、そこでようやく自分がどういう状況に置かれたのかに気付いて、ゆっくりと向き直るや悲鳴をあげた。
今全ての獣人達の目は、一人突出した春原にロックオンされたのだ。
さあ、狩の時間だぜえ！！（獣人の）
「フンガー！！」
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」
一人の獣人の雄叫びを合図に、一斉に獣人達が春原目がけ殺到する。
悲鳴を上げながら逃げ惑う春原とそれを追う獣人達は、グルグルとその場を回りだした。

「今よ、渚！！ぶっ放してやりなさい！！」
好機と見た杏がすかさず古河に指示を出す。
だが、何故か古河は困惑した顔をした。
「えっ！？でも……今魔法を撃ったら、春原さんにも当たってしまうかもしれないです……」
「大丈夫！こういうのは味方には当たらない様に出来てる物よ！」
「そうなんですか……？」
「そうよ！さあ、遠慮なくぶっ放しなさい！！」
「はい！古河渚、行きます！ファイアーボール！！」
目をつぶっておっかなびっくりながらも、古河が巨大な火の玉を放つ。
ドーーーーーン！！
「ぐおおお！！」
「ギャー！！あちっ！！あちちっ！！」
火柱が上がり、巻き込まれた獣人達が呻く。
「あの……春原さんのお尻燃えちゃってます！！」
「行くわよ朋也！」
「おう！食らえお手製ホウ酸団子だ！！」
「乱れ打ち！！」
敵が怯んだ隙に、ケツに火が点いて走り回る春原を見て血相を変えてる古河を軽く無視して、杏が両手の手裏剣と辞書を乱射しながら、俺は敵の口めがけホウ酸団子を放り込みながら斬り込む。
「ぺっぺっ！変な物食わせ……うごっ！！ちょっと待っ……ひでぶぅ！！」
「全部春原さんにも当たっちゃってます！！」

「ふう……何とか片付いたな」
最後の一匹にとどめを刺し、死屍累々の周囲を見渡しながら一息

つく。
春原を囮にして敵を集め、そこに範囲攻撃連発。
俺達の必勝パターンだ。
まあ、ぶっちゃけ俺らなら、この程度の相手は敵じゃねえ！
もっとも、手加減までは出来ねえから、情報は聞き出せそうにねえが……。
「あのう……春原さん、大丈夫ですか？」
「うう……ありがとう渚ちゃん……心配してくれるのは君だけだよ……」
辞書が顔面にめり込んだまま倒れている春原に、古河は恐る恐る近付いて無事を確認する。
でも見た目がグロイからか、傍らにまでは寄れないようだ。
「大丈夫だ。死んでなきゃそいつはすぐ回復するから」
「だからって、いきなり敵の前に蹴るのはやめてくれませんかね！！」
「いいだろ？どうせ武器もねえんだし。囮くらいやりやがれ！」
「ありますよ！！ほら、露店の特売で買ったダガー」
そう言って起き上がった春原が取り出したのは、妙に白いダガーだった。
「……って、それ杏仁豆腐じゃね？試しに噛んでみ？」
「何言ってんだよ岡崎、どっからどう見ても普通のダガー……ホントだ！ちょっと硬いけど食べられる！！」
俺に言われて刃の先をかじった春原が驚愕する。
またかよこいつは……。
「最近出回ってる、獣人達が作った杏仁豆腐製品みたいね」
そこで敵を全滅させてから姿を見ないと思っていた杏がひょっこり顔を出した。
大方、色々調べていたんだろうけど。
「杏、何か見つかったか？」
「ええ。中々興味深い物がね」

杏が発見したのは、地下への隠し通路だった。
どうやらさっきの獣人どもは、ここから湧いて出たらしい。
上に居たのは見張り役って所か。
……って、
「おい、杏。この下にまだ獣人どもがごろごろ居るかもしれねえんじゃ？」
「かもね。一応階段下の扉の前までは降りて視て来たけど、私もそれを警戒して扉の中までは確認出来なかったわ。妙な音がして扉越しじゃ中の気配も判らなかったし。でも、それより気になったのは匂いね」
「妙な音とにおい？」
杏に言われて俺達は額を寄せ合い鼻を鳴らして中の匂いを嗅いでみた。
なるほど。
ほのかに甘くややクセのある匂いが漂ってくる。
「確かに下からほのかに匂ってくるな」
「この甘くて独特の匂いは……杏仁です！」
「じゃあ、もしかしてこの下は……？」
「獣人達の杏仁豆腐装備製造工場……ってトコでしょうね」
「何だってぇ！？」
どういう訳だか獣人どもは昔から杏仁豆腐が好物らしく、またそれを加工する技術は人間以上とも言われているそうだ。
特に最近は、獣人達が作った杏仁豆腐製の武器や防具が闇ルートで市場にも流通しており、獣人どもの収入源となっているらしい。
素材が杏仁豆腐とは言え、奴等の作る装備は精巧に出来ており、普通に装備として装備可能。一部の傑作はそこいらの装備の性能を遥かに凌駕するとかしないとか。

「て事は、それを売り捌けばボロ儲けでウハウハ！？」
「バレたら当然豚箱行きだけどな。でもよ杏、ここが獣人どもの秘密工場だとしたら、下手に手を出すより、とっと役人にでも報せた方がいいんじゃねえか？」
たんにさっきので打ち止めだってんならいいが、もしまだ中に籠もっているとすりゃ、俺達の強さにビビッてるか、もしくは罠を張って待ち構えてるかだろ。
その場合、俺達だけじゃ手に負えねえかもしれねえし、最悪全滅も有り得る。
「でも、中にまだ敵が居るとすれば、奴等にもここが私達に発見された事は知られているでしょうし、もしこの中に鷹文が捕らえられていたとしたら？」
「軍が動く前に逃げられちまうかもしれねえか……」
「出入り口がここだけとは限らないでしょうしね……で、どうするの？」
「どうもこうも、入って確かめるしかねえんだろ？」
「まっ、そういう事ね」
あまり俺は気が進まなかったが、杏の言い分ももっともだった。
危険だとビビッてばかりいても、何の進展もねえだろう。
そう思い直し、俺は胆を決めたのだが、そこでやはり古河が不安そうに口を開いた。
「あの……とても危険なんじゃ……？」
「そりゃあね。危ない橋を渡る事も有るって言ったでしょ？もちろん、だからと言って無謀な真似をするつもりはないわ。侵入したら一時間以内に戻ってくるつもりよ。だから渚、あなたはここに残って見張りと、万一私達が時間内に戻らなかった時には一人で報告に戻ってちょうだい」
「そんな……皆さんを置いて私だけ戻る事なんて……」
「じゃあ、もし私達が敵に捕まってたら、あんたが一人で助けに来てくれる訳？」

「それは……ごめんなさい。多分私には無理です……」
「そういう事。ようするに、一番効率的で確実な行動を取れって言ってるの。もちろん、あくまで“万が一”よ。大丈夫！いざとなったら二人を囮にして、私だけでも戻ってくるから」
「ええ！？」
「あんた酷いっすね！！って、僕も行くのかよ！？」
「当たり前でしょ？囮一号が来なくてどうするのよ？」
「僕が一号かよ！！」
「頼んだぜ一号！俺まで回すなよ！」
「岡崎、お前もかよ！？あんたら滅茶苦茶酷いっすね！！」
少々キツイ言い方をしながらも、最後は軽口を言ってフォローするあたり流石杏だ。
……で、俺も囮ってのは冗談だよな？
そう目で問いながら杏を見ると、奴はニヤリとしやがった……！

罠を警戒して慎重に扉を開け中に侵入した俺達だったが、待ち伏せどころか獣人一匹現れやしなかった。
少々拍子抜けだったが、杏仁豆腐の匂いと機械音で敵の気配があっても解り辛い。
こういう所は物影から何時奇襲されないとも限らねえ。
春原を先頭に、俺たちは固まって警戒しつつ中を探索する。
地下にあった物は、やはり杏仁豆腐装備製造工場だった。
中々近代的で機械化されており、装置を止める暇も無かったのか、杏仁豆腐が出てくる装置やら、それを運搬してるベルトコンベアやらがまだ稼動している。
「さすがに中は凄い匂いね……」
口を忍者らしく頭巾で覆っている杏が呟く。
「うっぷ……何か僕ちょっと気持ち悪くなってきた……」

「ちょっと、吐くならどっか脇でやってよね」
「ちょっとくらい心配してくれませんかね！？」
「そうだぜ杏。春原、ほら、出ないように口にこの杏仁豆腐つめとけよ」
「お前も心配してるっぽく酷い事言うなよ！！……って！！」
「！！」
軽口を叩き合っていた俺達だったが、その突然の異変に流石に表情を引き締める。
稼動していた装置が一斉にピタリと止まったのだ。
やはり罠か！！
三人密集して背中を預け合い三方を警戒する。
だがその時、頭上から声が響いた。
「侵入者諸君。君達の仲間は我々が拘束した。君達も速やかに武装を解除し、投降したまえ」
スピーカーから聞こえた、癇に障る気障な声に俺達は愕然とする。
まさか、上に残した古河が捕まった！？
しまった！！まさか俺らを地下に誘導し、地上に残すだろう見張り役を狙う作戦かよ！！
しかも地下の俺らは袋のネズミじゃねえか！！
今度こそ、マジでやべーぜ！！どうなるんだ俺達！？

つづく

副会長っぽい杏仁豆腐

鷹文０５４番捜索の依頼を受けた俺達四人

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙
ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット＆作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・？？？（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※１、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※２、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※３、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

☆春原陽平／盗賊
通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＺ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ
武器・シャムネーコ（気品のある猫。逃走中）Ｄ

・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）Ｅ
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）Ｅ
アクセ・Ｈな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵の標的になりやすい。味方からもなりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ
武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）Ｃ
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）Ｂ
防具・鎖帷子＆忍装束（軽さを重視した、いかにも忍者らしい服）

C
特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

は獣人達の秘密地下杏仁豆腐工場を発見した。
だが、古河を地上に残し三人で中を探索していると、突如スピーカーから謎の声が。
しかもそれは、古河が捕らえられ俺達にも降伏を促す物だった。
まさに袋の鼠で人質までとられちまっている最悪の状況。
今度こそ、年貢の納め時ってヤツかもな……。

「隠れてないで姿を見せなさい！どうせ近くに居るんでしょ？それと、仲間の無事もね。降伏するかどうかは、それからよ」
うろたえている俺と春原を尻目に、杏がいたって冷静に俺達にも聞かせる様に言った。
なるほど、兎にも角にも敵の正体を知らなければ対処の仕様がねえ。
それに古河が本当に捕まったかどうかも確認しておくべきだろう。
装置が止まった事で、こちらからも敵の気配がわかる様になっていた。
どうやらかなりの人数に遠巻きに包囲されているらしい。
そこで俺は、ある違和感に気付く。
この気配は……まさか！？
「……杏、こいつら」
「ええ。どうやら思っていた以上に事態はややこしくなっている

みたいね」
やはり杏も既に気付いていたか。
獣人共の秘密工場内で俺達を包囲している敵の正体は……“人間”だ。
「フッ……さすがに相手の正体もわからぬ内に、剣を捨てる程愚かでは無いか……」
先程の声が今度は肉声で聞こえ、俺達は一斉にそちらを向いてギョッとする。
そこには、鎧にクマの被り物と言う異様な格好をした数人の大柄な男達を従えた、一際重厚な鎧に身を包んだやたら前髪の長い眼鏡の優男が立っていた。
「く、くまぁ！？」
「テメエが親玉か？」
「“責任者”と言ってくれたまえ。いかにも、俺がこの工場を任されている末原悠仁だ」
うざい前髪を掻き上げながら男は尊大に名乗る。
声といい仕草といい、つくづく癇に障る野郎だ。
だが、男にムカついている俺や相手が人間で驚いている春原とは違い、杏だけはあくまで冷静に男と対峙していた。
「末原？……確か反乱軍の副頭目もそんな名前だったわね。それにその被り物、見覚えが有るわ」
何！？反乱軍！？
「レジスタンス『ベア・アソシエイション』の“副総統”と言ってくれたまえ」

★末原悠仁／ロード／反乱軍ベア・アソシエイション副総統
ＨＰＢ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＡ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＣ
武器・サーベル（長くて軽く扱い易い剣）Ｂ
防具・プレートメイル一式（鋼鉄製の鎧一式。防御力は高いがとにかく重い）Ｂ

鋼鉄の盾（精錬した鉄製の盾。とても頑丈だが凄く重い）B
特殊能力
・うざい髪型（何か見てるとムカついてくる髪型。敵の標的になり易い）
・憎まれ役（嫌味を言って敵の目を自分に向かせる）
・？？？（奥の手）
※末原は原作智代ルートに出てきた“嫌な奴”です

な、なるほど……ベアだから配下はクマの被り物なのか……。
「いくら資金難だからって、まさか反乱軍が獣人と手を組んで、杏仁豆腐作ってるなんてね」
「フッ、我々ベア・アソシエイションの理念は全ての生物との共生共存。そこに獣人が含まれていたとして、何の矛盾が有る？」
「どうだか……あの凶暴な獣人が、そう易々と人間に従うとは思えないけどね……まあ、いいわ。それより、渚は……仲間は無事なんでしょうね？」
「フッ、そうだったな。おい」
末原が部下に合図をすると、後ろ手に縛られた古河が前に引き出される。
「渚！！」
「渚ちゃん！！」
「み、みなさん！！う～、すみません。捕まってしまいました……」
さすがに相当凹んでいる様だが、見た所大した怪我は無さそうだ。
無闇に俺達を傷付ける気は無いと見ていいだろう。
だからと言って、只で帰してはくれないだろうが……。
「さて、では改めて警告する。早々に投降したまえ。こちらとしては、あまり手荒な真似はしたくない」
「クソ！悔しいけど、渚ちゃんを人質にとられてるんじゃ、学校に行くしかないか」

「そうだな。そろそろ出席日数もヤベエし……ってか、俺等もう学生じゃ無いからな」
「じゃあ、トウコウってどういう意味だよ！？」
「武器を捨てて大人しく捕まれって事よ！陽平、あんたは黙ってなさい！私達まで同類だと思われるでしょ！」
「あんたとても失礼な人ですね！武器を捨てろ？それじゃあまるで、降参するみたいじゃんかよ」
「だから、そう言ってんのよ！」
「何だってぇ！？」
「それで、条件は何だよ？」
ツッコミ所が有り過ぎて厄介な春原の相手を杏に任せ、俺は完全に人を見下している眼をした末原に少し仕掛けてみる。
春原がアホな事を言ったからじゃねえ。
こいつは初めから俺達をなめていた。
それに反乱軍風情が偉そうに紳士ぶってる態度も気に食わねえ。
俺達が不利なのは重々承知だが、だからってこんな奴のただ言いなりになるのは御免だ。
「条件？」
「とぼけんなよ。大人しくしてりゃあ直ぐに解放してくれる訳じゃねえんだろ？」
「ほう。つまり取引をしようと言いたい訳か……君は自分が置かれている状況を把握出来ていない様だな」
「テメエこそ、俺等が何者で、何の目的が有ってこんな所に来たか解って言ってるんだろうな？」
意味有り気に出来る限り自信満々に言ってやる。
無論ハッタリだが、ここで相手に「迂闊に手は出せない」と思わせる事が出来れば、後々有利になる筈だ。
そう思ったのだが、末原は前髪を掻き上げながらフッと鼻で笑うと、
「“行方不明になった鷹文０５４番の捜索を請負った冒険者”だ

そうだな？」
ズバリ俺達の正体を言い当てやがった！
何だこいつは！？超能力者か！？
「そこの彼女が、訊いたら洗い浚い話してくれた」
「古河～～～！！」
「え？……すみません。話したらいけなかったんでしょうか？」
キョトンとした顔の意外な伏兵の登場に、腰砕けにその場に崩れ落ちそうになる。
素直過ぎるだろ……。
所詮ＩｎｔＤがＩｎｔＡに舌戦で勝てる訳が無かった！
「つまり、こちらとしては最早君達に利用価値が無い所を、大人しく投降するのなら身の保障はしようと言っているんだ。悪い話では無いと思うが？」
「それはどうかしら？私達に本当にもう利用価値が無いのなら、むしろここで武器を捨てるのはあんた達の思う壺だと思うけど？」
既に心が折れかけていた俺に代わって、ＩｎｔＣの杏が答えてくれた。
頑張れＩｎｔＣ！！
「我々の言う事は信用出来ないと？」
「反乱軍なんてやってる奴の言う事が、信用できるかよ！」
「だって、あんた達が本当にしたいのは、ここの存在を外部に知られない為の口封じでしょ？それとも、『口外しない』って約束すれば許してくれるのかしら？」
杏の鋭い指摘に、それまで余裕の笑みを崩した事の無かった末原の表情が一瞬揺らいだ。
だがしかし、またも髪を掻き上げる仕草で気を取り直すと、可笑しそうに笑い出す。
「クックックッ、なるほど。どうせ殺されるのなら、玉砕覚悟で抵抗する方がマシだと？愚かな考えは止めたまえ。それに、どうやら君達は我々を少々誤解している様だ」

「何がだよ？」
「初めから我々が君達を殺すつもりなら、既に君達はこの世には居なかったと言う事さ」
「！！」
末原の指摘に、流石に俺と杏は言葉を失った。
確かにその通りだろう。
反乱軍は今は落ち目とは言え、この国の正規軍とやりあってきた連中だ。
奇襲や伏兵は十八番であり、凶暴だが脳味噌まで筋肉の獣人達とは訳が違う。
末原の護衛であろう後ろの男達は、一人一人が俺等と互角かそれ以上の猛者と見て間違いなく、杖を持った魔導師の姿もある。
遠巻きの連中も、こいつら程では無いにしてもそれなりの戦闘員の筈だ。
口封じで俺達を始末する事はいつでも出来た。
でも、それをしなかったのは……一体何故なんだ？
「先程も言ったが……我々の理念は共生共存。つまり我々が望んでいるのは、誰も虐げられる者の居ない世界だ。無駄な殺生をしたくは無いのだよ」
「反乱だの暗殺だのをやってる連中が、無駄な殺生はしたく無いだって？」
「はて、暗殺は最も無駄な殺生をしないで済む合理的な手段だと思うが……そちらの忍者の君ならわかるだろ？」
「……それに、あんた達が暗殺してきた連中は、贈賄や圧政を敷いていた悪徳政治家や官僚ばかりだったわね……」
「そう、その通りだ！我々が標的としているは、この国を腐らせている悪だけだ」
「杏、何反乱軍の肩持ってんだよ？」
「別にそんなつもりは無いわよ。ただ事実を言っただけ」
「何度も言うが、反乱軍と言う呼び方はやめてくれたまえ。そも

そも国を憂い、平和的改革を望んでいた我々を、一部の既得権益者の立場を守る為に武力によって弾圧を始めたのは政府の方だ。君の方こそ、この国在り様が本当にこれでいいと思っているのか？」

「は、はぁ？」

何やら話が難しくなってきやがった。

だが、既にうんざりしていた俺に一切構う事無く、末原は雄弁に語り出す。

「ただ進化の過程が違うと言うだけで獣人達と分かり合おうともせず駆逐し、大量のクローンを奴隷として働かせる事で見せ掛けの繁栄を得たこの国に、本当に大義が有ると、従う価値が有ると思っているのか？確かに戦争は無くなり、国は富み栄えた。だがその実態は、潤ったのは一部の人間のみで、貧富の差はより激しくなり、クローン奴隷の進出と多くの兵士が兵役を解除された事で働き口を失った人間が急増し、物乞いをする者や餓死する者、自ら命を絶つ者が巷には溢れている」

「グスッ……そうです……家の近所にも、ご両親が居なかったり、捨てられてしまって路上で暮らしている可哀相な子達が沢山いました……」

見ると古河が泣いていた。

春原も珍しく神妙な顔をしている。

奴が言ってる事は全て事実だ。

でも、だから何だと言うんだ？

もちろん、俺もこの国が良い国だなんて思っちゃいねえ。

だが、奴の言う誰も虐げられない国なんて、聞こえはいいが在り得ねえ話だろ。

所詮人は、国なんぞに頼らず、何も期待せず、自分自身が強くなるしかねえんだ。

「こんな国でいいのか？否！断じて善い筈が無い！だから我々は、この国を正しい姿に変革すべく、命を懸けて戦っているのだ！」

「だから、クローンの媒体である鷹文０５４番を拉致したって訳

？」
俺と同じく奴の術中にはまっていなかった杏が、狙っていた様に鎌をかける。
この状況でも情報を聞き出そうとするとは……流石だぜ。
だがしかし、それは読まれていたのか、末原が動揺する事は無かった。
「残念ながら、それは我々では無い。この件に我々組織は無関係だ」
「そう……」
きっぱりと断言され、当てが外れた杏は溜息をつく。
この期に及んで嘘って事は無いだろう。
チッ、無駄足かよ。
「なら、あんた達の目的は何？私達をどうするつもり？」
「フッ、察しのいい君はもう気付いているんじゃないかね？単刀直入に言おう。どうかね君達、我々の仲間にならないか？」
な、何だとぉ～～～！？

つづく

刺客っぽい杏仁豆腐

行方不明となった鷹文０５４番探索の依頼を受けた俺達四人

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙
ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット＆作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・？？？（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※１、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※２、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※３、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

☆春原陽平／盗賊
通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＺ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ
武器・シャムネーコ（気品のある猫。逃走中）Ｄ

・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）Ｅ
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）Ｅ
アクセ・Ｈな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵の標的になりやすい。味方からもなりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ
武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）Ｃ
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）Ｂ
防具・鎖帷子＆忍装束（軽さを重視したいかにも忍者らしい服）Ｃ

特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

は、杏が見つけた獣人達が守る施設を襲撃したのだが、逆に獣人達の黒幕だった反乱軍・ベア・アソシエーションの罠に嵌って古河を捕らえられ、俺達も包囲されちまった。
しかも、俺達の前に姿を現した反乱軍の副総統だと言う末原

★末原悠仁／ロード／反乱軍ベア　アソシエイション副総帥
ＨＰＢ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＡ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＣ
武器・サーベル（長くて軽い扱い易い剣）Ｂ
防具・プレートメイル一式（鋼鉄製の鎧一式。防御力は高いがとにかく重い）Ｂ
鋼鉄の盾（精錬した鉄製の盾。とても頑丈だが凄く重い）Ｂ
アクセ・知的な眼鏡（頭が良さそうに見える眼鏡。何か秘密が……？）
特殊能力
・うざい髪型（何か見てるとムカついてくる髪型。敵の標的になり易い）
・憎まれ役（嫌味を言って敵対心を上げ、敵の目を自分に向かせる）
・？？？（？？？）

は、俺達に仲間になれと言い出しやがった。
こいつ、一体何を考えていやがる？
胡散臭さくて仕方がねえが、俺達は袋の鼠で、古河が人質に取られちまっている以上、下手な事は出来ねえ。

チッ、ここは交渉を続けてチャンスが来るのを待つ他ねえか……。

「獣人達との戦いで、君達の力は見させてもらった。どうかね？君達程の実力なら、幹部候補として迎えてさせてもらうが」

「か、幹部！？……フッ、どうやらこの僕の戦いぶりを見て、カタツムっている様だね」

前髪を掻き揚げて気取りながら、また春原が訳のわからねえ単語を使いやがった。

末原はそれに眉を顰め、杏はまたかと呆れて半眼を向ける。

「カタツムっ……て何よ？」

「フッ、ビビっちまって、貝に引っ込んでるって意味さ」

「……ひょっとして、“かいかぶる”って言いたい訳？」

「ウッ……そ、そうとも言うね」

「そうとしか言わないわよ。そもそも買被るって、謙遜して言う台詞だから」

「えっ……？」

“貝”でも無えしな。後、戦いぶりも何も、お前は逃げてただけだからな」

「あんたがいきなり敵の前に蹴ったからですよね！？」

「……そろそろいいか？」

オチがついた所で、待ちかねた様に眼鏡の端をくいっと上げながら末原が入ってきた。

やべえやべえ、俺達敵に囲まれてるんだったぜ。

「致し方無い。では、傭兵である君達に合わせ、ビジネスの話といこう」

返事をした訳でも無いのに、さっきの勧誘は無かった事になっていた。

まあ、はなから仲間になる気はねえけど、俺達まで春原の同類と

思われたみたいで何か癪だ。
「我々の依頼を受けてくれるのなら、君達が雇われた額の2倍、いや、3倍出そう」
「さ、3倍！？岡崎、雇われた額の3倍つったら、ウハウハじゃん！！」
途端に春原が、末原の言葉に鼻息を荒くして食いつく。
「ああ、10年は遊んで暮らせるな。だが、落ち着け春原！」
「そうよ。肝心の依頼の中身を聞いて無いじゃない。それで、あんた達の依頼って何？」
「なに、そう難しい事では無い。君達は引き続き鷹文の捜索を続け、そこで得た情報をこちらに逐一報告してくれさえすればいい」
「なるほど、スパイって訳ね」
「どうかね？元の依頼を達成すれば、当然君達は元の依頼主からも報酬がもらえる。つまり、トータルで4倍の報酬が得られると言う訳だ。悪い話ではあるまい？」
「よ、4倍つったら岡崎！！武器も装備も買い放題だよ！！」
「ああ。太刀魚なら千匹は買えるな」
「せ、千匹！？」
「いや、太刀魚はもう止めなさいよ」
「あと、武器と装備じゃ意味被ってるからな」
春原が興奮し過ぎて何にでも過剰に反応するのも無理は無い。その話が本当なら、旨過ぎる話だ。
情報を横流しにするだけで、容易く大金が手に入る。
だが、それだけに胡散臭い。
旨い話には、必ず裏が有る物だ。
「わからないわね。どうして鷹文捜索の情報なんかに、そんな大金を出すのか」
「それを話す必要は有るまい？それとも、君達は魔術師達の本当の目的まで知った上で、奴等に与していると言うのか？」
「本当の目的？」

思わず末原の言葉を反芻しちまった。
何だ？こいつら何か知っているのか？
「まあ、よかろう。我々の目的は、クローンの素体となる鷹文０５４番を葬る事だ」
「ええっ！？」
葬るという言葉に驚いたのか、捕まっている古河が声をあげる。
まあ、俺や杏はそれくらいの事は察しついていたが。
だが、それが事実だとしても、何故反乱軍のこいつらがそこまでクローンなんかに固執しているのかが解らねえ。
「あの、葬るって、鷹文さんを殺してしまうつもりなんですか？」
「何か勘違いをしている様だが、君達が探している鷹文０５４番もまたクローンであり、オリジナルの鷹文は既に死んでいる。魔術師どもはそのオリジナルの死体を実験台にしてクローン技術を研究し、その成功例である０５４番をコピーしている訳だ。奴隷やモルモットとして働かせる為にな」
「そ、そうなんですか？」
「これは立派な死者への冒涜であり、自然の摂理に反する所業だ。そんな事をしている奴等と、それを止めさせようとしている我々の、どちらが人道的と言えるかね？」
「それは……でも、それなら、鷹文さんを保護してあげればいいんじゃないでしょうか？例えクローンさんと言えど、殺してしまうのはいけないと思います」
鷹文に同情しているのか、古河は遠慮がちに、しかし大真面目に訴えかけていた。
すると末原は、一度人差し指でクイと眼鏡を上げると、もっともらしく頷いてみせる。
「なるほど。案外、０５４番の逃亡に協力した人間も、それが目的だったのやもしれんな。いいだろう。０５４番に自身の生存を望む意思が有るのなら、我々が保護をしても構わない」
「本当ですか？」

「約束しよう。しかし、それには当然、君達の協力が必要だ」
「わかりました！そういう事でしたら……」
「って、ちょっと待ちなさいよ渚！何丸めこまれてんのよ！？」
言いかけた了承の言葉を、慌てて杏が遮る。
危ねえ……俺等だけならともかく、御人好しの古河が居たんじゃ、これ以上こいつと交渉を続けるのはヤバそうだ。
「悪いけど、あたし達には反乱軍の片棒を担ぐ気は無いわ」
杏も俺と同じ考えに至ったらしく、きっぱりと拒絶の意思を示す。
「ほう、何故かね？どちらが正しいかは明白であり、君達にとっても得だと言うのに」
「そうだよ杏！ちょっと情報タレ流すだけで４倍だよ４倍！こんなオイシイ話無いって！」
「杏ちゃん、私も反乱軍さんの言ってる事の方が、正しいと思います」
「あんた達はだまってなさい！」
すっかり丸めこまれている二人を一喝して睨みつけ黙らせると、杏は腕組みをしながら末原を斜に見据えて反撃に出る。
「まず、“どちらが正しいか”なんて、あたし達はには関係無い。裏にどんな事情が有るにせよ、仕事を請けたからにはそれを全うするのがプロって物でしょ？仕事に関する秘密厳守は常識。それを横流ししたなんて事がバレたら、どこからも信用されなくなって、仕事無くなるわよ」
「でも、１０年遊んで暮らせるんだよ？そんだけ経ったら、みんな僕達の事なんて忘れてるって」
「バカね。万が一魔術師達に裏切った事がバレたら、あたし達消されるわよ」
「け、消される……！？いや、でも、バレなきゃいい事だし……」
「大金を手にしたら、あんたが一番自慢して回りそうだけどね……それに、はたしてこいつらに、そんな大金を支払う能力が有るのかしら？」

「へ？」
「こいつらベア・アソシエイションはね。数ヶ月前に本腰入れた正規軍の大攻勢にあって、本部は壊滅、首領は生死不明って話よ。こいつらはその残党に過ぎないわけ」
「なんだよそれ！？じゃあ、僕等に払う金なんて無いって事！？」
「さあ、実際の所はわからないけど、少なくても、こそこそ杏仁豆腐作って獣人共の上前はねてるようじゃ、相当資金繰りに困っていそうだけど？」
「うっ……！？だ、騙したな！？」
「騙したとは人聞きが悪い。確かに余裕が有る訳では無いが、君達に支払う分くらいは有る」
「有るって！」
杏の話を聞いて食ってかかったと思えば、あっさり落ちる春原。
「それに、私達は正規軍に敗れたのではない。ある取引をして暫く鳴りを潜めているだけだ。この場には居ないが、総統もまた御健在である」
「取引？」
相容れない存在のはずの、正規軍と反乱軍がか？
武力制圧したってのは表向きの話で、実際は話し合いで解決したと？
そんな事が有り得るのか？
不可解な末原の話に、さすがに杏も眉をひそめている。
「少し話過ぎてしまったか……さて、改めて訊くが、それでも我々に手を貸す気は無いと？」
「無いわ」
「そうか……それは残念だ……」
そう言いながら、末原が時折見せていた眼鏡を指で上げる何気ない仕草に、一瞬怪しい光が見えた気がした。
何だ？
眼鏡が照明の光を反射しただけだと思うが……何故か妙にそれが

気になった。
「さて、もう一度訊こう。本当に我々に手を貸す気は無いのか？」
「さっきからクドイ奴だな！俺達には……」
「はい。わかりました」
苛立ちながら答えようとして、それを遮る様に放たれたその言葉に一瞬耳を疑う。
今はいと言ったのは他でもなく、俺と一緒に抵抗していた杏だったからだ。
「おい、杏、何言って……！！」
思わず肩を掴んで強引に振り向かせる。
だが、何の抵抗も無くこちらに向けられたその目は虚ろで、明らかに異常だった。
「テメエ！杏に何をしやがった！？」
「おかしな言いがかりはよしてくれたまえ。彼女は自身の意思で我々に手を貸す事を了承したのだ。そちらで反対しているのは、最早君だけだな」
「ざけんじゃねえ！！おい、春原！やるぞ！！」
「ああ……やろう！岡崎！」
春原は、拍子抜けする程威勢良く頷いたかと思うと、何故か後ろから俺の両肩を掴んでくる。
「何やってんだよお前……って！？」
首を捻りながら春原の目を見てギョッとなる。
こっちは血走って完全にイッちまっていた。
「ハア、ハア、嬉しいよ岡崎！僕もずっと前からお前のこと……！」
「チョッ、やめろ春原！！目を覚ませ！！」
「僕達、両想いだったんだね……！！」
「ええっ！！お、お二人は、そういう御関係だったんですか！？」
「御関係じゃねえ！！」
事態を飲み込めていない古河は、とても嫌過ぎる誤解をしてくれ

た。
どちらにしろ、これはヤベエ！！
春原はともかく、頼みの杏が敵の暗示か何かにかかっちまってる。
「フッフッフッ、さあ、どうするのかね？大人しく我々の軍門に下ったらどうだ？」
「チッ、ついに本性を現しやがったな！これがテメエら反乱軍のやり方かよ！！」
「お、岡崎ぃ！！」
「うおっ！！」
マズイ！！
末原に気を向けた隙をつかれ、春原に上に圧し掛かられる様にして押し倒されちまった。
そして目の前には、唇を突き出しながらゆっくりと迫ってくるおぞましい春原の顔が！！
「ムチュ～～～！！」
「や、やめろぉぉぉおぅぅぅっ！！！！！」
それを両手で懸命に堪えるが、俺の右肩は古傷の所為で力がうまく入らねえ。
ヤベエッ！！押し切られる！！
ヤメロ！！ヤメテくれ～～～～～～～～！！！
死を覚悟したその瞬間、工場の明かりがバチンと消えた。
「な、何だ！？停電か？ギャッ！！」
「ど、どうした！？ぐあっ！！」
闇の中から次々と聞こえて来る断末魔の悲鳴。
何だ！？
一体何が起きている！？
「クッ、落ち着け！まずは明かりを点けろ！」
末原の声から暫くして悲鳴が止んだかと思うと、再びバチンと明かりが点く。
「きゃあっ！！」

その途端、あまりにも陰惨な光景に、古河が悲鳴を上げて両手で顔を被う。
照明が消えていた時間は、一分にも満たないはずだ。
にもかかわらず、さっきまで囲んでいた数十人は居た敵の変わりに、死体の山が出来ていた。
立っているのは、俺と杏と古河、そして末原のみ。
春原も死んではいないが、完全にのびちまっている。
まあ、それは俺がやったんだが……。
「こ、これは……くっ、出て来い！！居るのはわかっているぞミス・ブシドー！！」
それまでまったく表情を変える事のなかった末原が、明らかに血相を変えながら怒鳴る。
するとそれは……まるで何も無い所から湧いて出てきたかの様にゆらりと姿を現した。
女だった。
細身に胴衣と袴を纏い、手には自分の身長程もある日本刀を持った。
整った顔立ちに切れ長の目、その冷たい表情と容姿とが相まって……ゾッとする程美しかった。
「一つだけ、貴方に訊きたい事があります」
「貴様に答える義理など無い！」
「先程貴方が言っていた、“取引”とは、事実ですか？」
「！！……フッ、貴様等は自分達の唯一の希望を、自ら放棄したのだ！！いや、待て……もしや……そうか、あの男なら有り得る事だ……フッフッフッ……ハッハッハッ、ハァーハッハッハッ！！そうか！そういう事か！！もはやこの国の命運は尽きた！！自ら棄てた希望によってな！！」
「やべえ！見るな！」
唐突に始まった、会話が成立しているかすら疑問な問答を大笑して終えたかと思うと、その虚をつくかの様に末原が再び眼鏡に指を

かける。
だが、
「なっ……！？」
眼鏡のフレームが真ん中からズレたかと思うと、末原の驚きの声と共に乾いた音を発てて床に落ちた。
「見下げ果てた人ですね。大仰に理想や大義を語りながら、結局その様な紛い物の力に頼るとは」
「黙れ！！力なき正義に、何の意味が有る！？」
奥の手を失い、冷徹な瞳に見下され激昂した末原は、腰のサーベルを抜き放ち、鋼鉄の盾を構えながら女に突進してゆく。
しかし女は、まるで観念してしまったかの様に瞳を閉じたまま微動だにせず、ただ小さく呟いた。
「……そうですね……」
それは一瞬、いや、その何十何百分の一かの出来事だったのだろう。
ぶっちゃけ俺には、何が起きたのかすら理解不能だった。
ただ、末原が振るった剣は女の身体を素通りし、末原はそのままピタリと動きを止める。
「フッ……総統……出来れば貴女を……いつ……まで……も……ゴフッ！！」
次の瞬間、重厚な鋼鉄の盾は真っ二つに割れて落ち、末原は自らの作った血の海に沈んだ。
「……だから、貴方は“悪”なのです……」
一体いつ着いたのかも判らぬ血糊を拭って、女は刀を鞘に納める。
そして無表情のままこちらに歩いて来たかと思うと、擦れ違い様、抑揚の無い声で俺にこう告げた。
「少しでも長く生きる事を望んでいるのなら、ここで遭った事は忘れる事です」

全員集合！っぽい杏仁豆腐

謎の女剣士の助けによって、反乱軍の秘密地下杏仁豆腐工場から無事脱出出来た俺達四人。

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙
ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット＆作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・???（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※1、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※2、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※3、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

☆春原陽平／盗賊
通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＺ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ

武器・トライデントガム（三叉のガム。シュガーレス）Ｅ
・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）Ｅ
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）Ｅ
アクセ・Ｈな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵の標的になりやすい。味方からもなりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ
武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）Ｃ
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）Ｂ

防具・鎖帷子&忍装束（軽さを重視したいかにも忍者らしい服）C
特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

その後も一週間程探索を続けたが、これと言って有力な情報は得られなかった。
そんな折、連絡役の杏の配下からある報告を受ける。
一族の巫女である杏の双子の妹が依頼主の召集に応じ、城に来るらしい。
何でも、彼女に鷹文０５４番の居場所を占わせようとしているとか。
そこで、戦果の報告も兼ね俺達も一度依頼主の元に戻る事にした。
杏の奴、妹の事がやたら心配みたいだしな。
まあ、俺も少なからず興味は有る。
……半分怖い物見たさだが……。
双子らしいから容姿は似てるだろうが、頼むから性格まで似ないでくれよ。

「椋！」
「お姉ちゃん！」
杏と共に城の外で妹の到着を待っていた俺達三人は、杏に手を借りながら馬車から降りてきた少女を見て目が点となる。
忍者の里の巫女だと聞いていたから、俺はてっきり和服だと思っ

ていた。
いや、どう考えても着物だろう。
杏だって忍装束なんだし、普通、いかにも巫女らしい衣装のはずだ。
だが、出てきたそいつの服装は……どう見ても淡いピンクのナース服だった。
下も赤い袴とかでは無く、タイトなミニスカートに白いストッキング。
頭にはナースキャップまで乗っかっている。
「あれ……？岡崎、あの格好って、巫女さんじゃなくない？」
「ああ……お前と同じ感想なのは癪だが、俺も今そう思った」
「癪って何だよ！？」
「わあ……とっても可愛い看護士さんです」
どうやら古河はあまり疑問に思っていないらしい。
ひょっとして……最近の巫女はナースなのか？
「紹介するわ。この子が妹の椋よ。椋、こっちの子が今回一緒に組んでる古河渚。で、残りの二人が例の朋也と陽平ね」
「あ、あの……初めまして、藤林椋です。あ、姉がいつもお世話になっています」
杏の紹介を受けて、緊張しているのか少し赤くなりながら俺達にお辞儀する妹。
「初めまして、古河渚です。いえ、私の方こそ杏ちゃんにはお世話になりっぱなしで……本当に申し訳無いです……」
それに対し、やはり恐縮しながら深々と頭を下げる古河。
なんか、どちらかと言えば内面は古河の方に似ている気がする。
杏が二人にならなくて良かったとは思うが、正直イマイチ頼りなさ気だ。
「何言ってんの渚……手がかかるのは、この二人も一緒よ」
「お姉ちゃん、フォローになってないよ」
「そうだぜ杏。古河はともかく春原と一緒にだけはしないでくれ。

俺まで人類じゃないみたいじゃねえか」
「僕だって人類だよ！」
「まあ、それはともかく、杏からは巫女さんだと聞いてたんだが……？」
先程からの疑問を問いながら、視線を上下に動かして改めて全身を確かめる。
やっぱりナースだよな……。
すると、俺の視線に気付いた椋は真っ赤になり、両手で胸を隠しながら身を固くして半歩後ずさった。
やべっ！誤解されちまったか？
と、思った瞬間、強烈な殺気を感じて反射的に身をよじる。
ブオン！！
突風が頬をかすめ、俺の顔があった場所を突き抜けて行った。
危ねえ……まともに食らったら死んでたぞ！
ドッと吹き出てくる嫌な汗を感じながら恐る恐る殺気の主に目を向けると、そこには長い髪を逆立て両手に分厚い辞書を持つ赤眼の鬼が居た。
「あんた……堂々と私の目の前で妹を変な目で見るなんて、いい度胸じゃない……！」
「ち、違う！！誤解だ！！ただ、格好が巫女っぽくないなって思っただけで、やましい気持ちはまったくない！！」
「……本当に？」
「マジだ！！マジ！！」
「……」
必死の弁解で何とか杏は辞書を仕舞ってはくれたが、尚も疑惑の念のこもった半眼で俺をガン見してくる。
まさに蛇に睨まれた何とやら、俺は身動ぎ一つ取れず唾を飲み込む事しか出来ない。
「……まあ、いいわ。椋はねえ、一族の巫女でもあるけど、普段はプリーストとして、医療班をやってるのよ」

☆藤林椋／プリースト
ＨＰＤ／ＡｔｋＤ／ＤｅｆＤ／ＩｎｔＢ／ＤｅｘＥ／ＳｐｄＤ
武器・ラッキーモーニングスター（ラッキー？な棘付きの鉄球を鎖で繋いだ武器）Ｃ
防具・白衣の天使っぽいピンクのシルバーローブ（思わず看護されたくなる清潔感溢れる服）Ｃ
アクセ・トランプ（占いにも暇つぶしにも使える万能ツール）
特殊能力
・医療知識（傷の手当てが出来る。回復薬の効果２倍）
・お弁当（真心のこもったお弁当。食べると感激のあまり失神する）
・占い（的中率０％という脅威の的中率を誇る占い）

「……ああ、なるほど。それでか」
確かにプリーストは回復魔法に長けたジョブだが、それとナースはまた別物だろ？とつっこみたくはあったが、杏を刺激したくないのでここは納得しておこう。
「へ～、そっか、椋ちゃんプリーストなんだ～。僕も椋ちゃんに優しく看護されたいな～なんて」
すかさず春原が、よせばいいのに鼻の下を伸ばしながら軽口をたたく。
今さっき俺がどんな目にあったかまったく学習していないようだ。
「えっ？あの……」
「そお……なら、私が手伝ってあげようか？もう二度と立てないくらいギッタンギッタンに！」
再び辞書を何処からか取り出しながら、杏が凄む。
「うっ……！遠慮しておきます……」
「俺も手伝うぜ杏！でも、こいつ再生能力強いから、半殺しでも足らなそうだぞ？」

「お前まで手伝おうとしないでくれますか！！」
「クス、二人とも、お姉ちゃんが話していたとおりの人達みたいですね」
「そ。本当に手がかかってしょうがないわよ」
椋が可笑しそうに笑ってくれたおかげか、呆れた様に溜息をつきながらも杏の機嫌も幾分直ったみたいで、俺の方もホッとする。
「それで、さっきからぼ～っと突っ立ってるけど、用件は何なの？ことみ」
いきなり杏が俺達の背後を見ながら呼びかけた。
は？と思いながら振り返ると、何時の間にかそこには見知った顔が立っていて、こちらに寄って来る。
確か依頼主の魔法使いの弟子である一之瀬ことみだ。

☆一之瀬ことみ／ウィザード
ＨＰＤ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＤ／ＩｎｔＡ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・ルシファースピア（柄の両端に三日月の様な刃と球型の鈍器が付いた星をも砕く槍）Ｓ
防具・聖なる黒いドレス（大人っぽいドレス。聖なる力で守られている）Ｂ
アクセ・バイオリン（使う人によっては、凶器にもなる楽器）
特殊能力
・博学（何でも知ってる。知ってることだけ知ってる）
・テレポート（師匠直伝の移動魔法。一度行った場所に皆を運べる）
・バイオリン演奏（そのあまりの素晴らしさに、聴く者には天国が見える）

若くして魔法使い系最上級職のウィザードになった天才少女で、俺達は依頼を受けた際に顔を合わせているが、相当の変わり者で人見知りらしく、人付き合いはかなり苦手だとか。

とても客の出迎え役には向いてなさそうだが、こいつが来たのには訳がある。
「あなたが、藤林の里の巫女さんなの？」
「あっ、はい。えっと……」
「ことみ」
「え？」
「ひらがな三つでこ・と・み。呼ぶ時はことみちゃん」
「ああ、あなたが……初めまして。藤林椋です。椋と呼んで下さい」
それが自己紹介なのか？と不安になったが、どうやら椋の方もことみを知っていた様で意思の疎通は出来たみたいだ。
「椋ちゃん、あなたを迎えに来たの。お師匠様がお待ちかねなの」
「あっ、はい。わかりました」
「それじゃあ飛ばすの」
「えっ？」
いきなり「飛ばす」と言われて椋が面食らったのも無理は無い。
ことみは世界に数人しか使える奴が居ない空間転移魔法テレポートの使い手なのだ。
「ことみ、私達も一緒に飛ばしてちょうだい。別に構わないでしょ？」
「わかったの」
杏の言葉にコクンと素直に頷くと、ことみはどこからか三日月と満月を模った様な奇妙な錫杖だか槍だかを取り出すと、それをクルクルクルと巧みに回転させてから自分の前で縦に構え、精神を集中させて呪文を唱える。
「ハルマゲドン！１０００分の１！テレポートなの」
ことみが槍の丸い方で地面を叩くと、周囲に光の柱が立ち昇り、俺達は光の中に消えた。

一瞬の浮遊感を味わい周囲の光が消えると、そこはもう城内に在る謁見の間だった。
歩きなら数十分はかかる距離を一瞬で来れちまうんだから、本当に便利なモンだ。
「凄い……これがテレポート……！」
「ホント、ビックリだよね」
「お師匠さま、椋ちゃんを連れて来たの」
「うむ、来たか。待っておったぞ巫女殿」
「ええっ！？」
そしてそこでことみが師匠と呼んで傍らに立った人物を見て、椋はテレポート以上に驚いてキョトンとする。
そりゃあそうだろう。
ことみの師匠であり、俺達の依頼主の姿は……どう見ても5歳くらいの幼女だったからだ。
「うむ。このナリじゃ、驚くのも無理はあるまい。しかし正真正銘わしがこの城の主にして、世界一の大魔法使いであるともじゃ」

☆三島とも／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＳ／ＤｅｘＥ／ＳｐｄＥ
武器・大魔法使いのスタッフ（とても賢くなりそうな杖）Ａ
防具・大魔法使いのローブ（一見幼稚園の制服と見間違えそうだが、立派なローブ）Ａ
特殊能力
・ブースト（味方全員の能力を強化出来る魔法が使える）
・テレポート（最近一度行った場所になら、魔法で瞬間移動出来る）
・禁呪（本来使用を禁じられている様々な魔法を使用する）
「お師匠様は延齢の秘術のかけすぎで、見た目ロリになってしま

ったの」
「これ、ことみ。かけ過ぎではなく、わしの力があまりに強大過ぎて、加減を間違えてしまっただけじゃ。おかしな事を言う物ではないぞ」
「ごめんなさいなの」
いや、同じ事だろそれ……てか、もはやロリどころじゃないからな。
椋の方は話を聞いてもまだ半信半疑の様子で、杏に戸惑いの視線を向けていたが、それを察した姉に無言で頷かれ、そういう物なのだろうと割り切り前を向いた。
「うむ、納得したようじゃな。それでは本題に入るが、我々が行方不明になった鷹文０５４番を探している事は知っておるな？」
「はい」
「方々を探したのだが、依然として手掛かりすら掴めておらぬ状況じゃ。加えて、幾つかの探索隊が何者かに襲撃され、全滅したと言う報告も来ておる」
「えっ！？それって、初耳なんだけど？」
春原が驚きのあまり声を上げる。
他にも探索隊がいる事は知っていたが、俺もそれは初耳だ。
「やられたって事は、明確な敵が居るって事か？獣人とかじゃなくて？」
「わからぬ。じゃが、生還した者の話では、突然奇襲を受け成す術もなかったようじゃ」
ともの話を聞いて俺が真っ先に思い浮かべたのは、あの杏仁豆腐工場で出会った女剣士だった。
だが、それは無いかと直ぐにその考えを打ち消す。
あいつが敵なら、俺達もあの場で始末されていたハズだ。
とすると、他の隊を襲ったのは獣人か、反乱軍、もしくは他にも敵が居るか……か。
なるほど。これだけ探しても０５４番の手掛かりどころか、敵の

正体すら掴めねえんじゃ、占いに頼りたくもなるわな。
「と、いう訳でじゃな。正直、現状は手詰まりの状態じゃ。そこでお主の手を借りたい。どうじゃ？やってくれるか？」
「わかりました。では、鷹文０５４番さんの居場所を、占ってみます」
それまでどこか頼りなさ気だった椋だったが、一変して毅然とした巫女の表情で頷くと、ともの前に進み出て、持参していたカバンからトランプを取り出す。
って、トランプで占うのかよ！？
「えっ！？トランプ！？」
「黙ってなさい！儀式の気が散るでしょ！別に媒体は何でもいいのよ！」
先に疑問を口にした春原が杏に小声で一喝される。
つっこまなくて良かったと思いながら、椋の儀式とやらを見ていたのだが、
「あっ！！」
シャッフルしている最中に、バラバラと落としていた……。
おいおい……やっぱり頼りねえな……。
と思っていたのだが、椋は落ちたカードを暫くジッと見つめた後、ゆっくりとともに向かってこう言った。
「出ました……鷹文０５４番さんは……少なくともこの城には居ません」
「何じゃと！？」
「……って、そんなの当たり前じゃねえか！！」
「……って、そんなの当たり前じゃん！！」
思わず春原と俺のつっこみがハモる。
そんな当前の事、占うまでもねえだろ馬鹿馬鹿しい。
だが、どういう訳かともとことみ、そして杏は尚も神妙な顔つきをしていた。
「違うのよ……椋の占いはねえ……絶対に当たらないのよ」

「はぁ？何それ？それじゃあ、やる意味無いじゃん」
「いや、待て！絶対当たらない占いで、この城には居ないって出たって事は……」
「うむ。つまり０５４番は、この城の中に居ると言う事じゃ」
な、なんだって～～～～～～！？

ようやく攻略開始っぽい杏仁豆腐

――――――――かつて、この地には獣人最大の拠点である巨大地下迷宮が存在し、数多の勇者達がこのダンジョンに挑戦し、散っていった。

如何なる大軍を投入しようとも成果を得られず、被害ばかりが増えていく状況に頭を抱えていた時の為政者達は、国一番の賢者に意見を求めた所、彼女はこう言った。

「それなら地上への出入り口を結界で塞いで、獣人を閉じ込めてしまえば良かろう」

かくして、臭い物には蓋とばかりに結界が張られ、更にその封印の監視と防衛の為に城が建てられ、封印を施した賢者はその城主となった――――――――

「と言う訳じゃ」

玉座に座って届かない足をぶらぶらさせながら、極ロリ城主は自慢気にこの城が出来た逸話を語った。

「いや、訳じゃって言われても、それと今回の件に何の関係があるんだ……？」

「察しの悪い奴じゃな」

「要するに、椋の当たらない占いで私達の探してる鷹文はこの城には居ないって出たから、なら、この城の何所かに居るって訳。で、それなら地下にあるその迷宮に居るんじゃないかって事でしょ？」

「ああ、そういう事か」

「お、お姉ちゃん……」
情け容赦の無い杏の説明でようやく合点がいく。
いや、でも待てよ。
「迷宮への入り口は結界で塞いであるんじゃないのか？だとしたら、どっから入ったんだ？」
「そう言えばそうよねえ」
「ダンジョンへの入り口はあくまで獣人に対しての物だから、人間は通る事が出来るの」
「そんなに便利な物なのか……？」
「うむ。何しろこの国一の大賢者であるわしがかけた物じゃからな」
「あの……だとしたら、鷹文さんを連れ去ったのは、獣人達じゃない事になりませんか？」
椋の鋭い指摘に、その場に居た者の視線が一斉に集まり、彼女はびくっと身を竦ませる。
そうだ。その通りだ。
「犯人は獣人じゃないって事は……一体誰なんだ？」
「それは判らぬ。獣人共の他にも鷹文や我等の事をよく思ってはおらぬ輩は多いからのう。それらの調査も含め、早速お主達にダンジョンの探索を頼みたいが、どうじゃ？やってくれるか？」
「まあ、乗りかかった船だしな。やってやるぜ！」

てな訳で、ダンジョン探索に向かう事になった俺達は、一度準備を整え、翌日ダンジョンの入り口の有る城の地下に集合した。
メンバーは以下の通りだ。

☆岡崎朋也／剣士
通り名／リガールドの赤い牙

ＨＰ（体力）Ｂ／Ａｔｋ（攻撃力）Ｂ／Ｄｅｆ（防御力）Ｂ
Ｉｎｔ（知力）Ｄ／Ｄｅｘ（器用さ）Ａ／Ｓｐｄ（素早さ）Ｂ
武器・ショートスピア（短めの槍。片手でも扱いやすい）Ｃ
防具・工事用ヘルメット＆作業服一式（動きやすく作業時の安全性も高い）Ｄ
・鉄の盾（鉄製の丸い盾）Ｃ
アクセ　木彫りの海星（手作りのヒトデ。風子が呼び出せる）
特殊能力
・電気工技能（電気工としての知識を活かし、トラップ作成や簡単な修理が出来る）
・フーコマスター（妖魔風子を召喚する。たまに勝手に出る）
・？？？（最後の奥の手的な物。バレバレだが秘密）
※１、能力及び装備は作者の勝手な主観による物です。基本高Ａ～Ｅ低の五段階。
※２、原作ゲームと多少ステータス項目における意味合いが違います。
※３、剣士と言う職業柄？か、若干朋也の口調が粗野になっていますが仕様です。

☆春原陽平／盗賊
通り名／リガールドの黄色いサル
ＨＰＡ／ＡｔｋＣ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＺ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＢ
武器・トライデントガム（三叉のガム。シュガーレス）Ｅ
・ダガーっぽい杏仁豆腐（ダガーの形をした杏仁豆腐。一応短剣代わりになる）Ｅ
防具・これ鎧！？一式（本当に鎧なの！？と疑問の残る装備一式）Ｅ
アクセ・Ｈな本（敵と男が釘付けになる。たまに女もなる）
特殊能力
・金髪（なんかムカつくので敵の標的になりやすい。味方からも

なりやすい）
・オートリジェネ（どんなダメージも次のターンには勝手に回復する）
・妹思い（妹がピンチになると、駆けつけかばう）

☆古河渚／魔法使い
ＨＰＥ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＥ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・魔法使いのスタッフ（賢くなりそうな杖。あまり直接攻撃には向かない）Ｅ
防具・魔法使いのローブ（賢くなりそうなローブ。防御魔法がかけられている）Ｂ
特殊能力
・演劇部（味方の一人になりきる。あくまでなりきるだけなので、能力はそのまま）
・お母さんのパン（お母さんが焼いたパン。食べると震えが止まらなくなる）
・？？？（奥の手。まだ内緒）

☆藤林杏／忍者
ＨＰＢ／ＡｔｋＢ／ＤｅｆＣ／ＩｎｔＣ／ＤｅｘＡ／ＳｐｄＡ
武器・手裏剣（全方位に投げれる投擲武器）Ｃ
・辞書（全方位に投げれる投擲武器）Ｂ
防具・鎖帷子＆忍装束（軽さを重視したいかにも忍者らしい服）Ｃ
特殊能力
・無限書庫（杏リミテッド・ブック・シェルフ。何処からか無限に本が取り出せる）
・獣使い（忍猪のボタンを使役する。七変化するらしい）
・藤林流忍術（小雪忍……いや、藤林流忍術が色々使える）

☆藤林椋／プリースト

ＨＰＤ／ＡｔｋＤ／ＤｅｆＤ／ＩｎｔＢ／ＤｅｘＥ／ＳｐｄＤ
武器・ラッキーモーニングスター（ラッキー？な棘付きの鉄球を鎖で繋いだ武器）Ｃ
防具・白衣の天使っぽいピンクのシルバーローブ（思わず看護されたくなる清潔感溢れる服）Ｃ
アクセ・トランプ（占いにも暇つぶしにも使える万能ツール）
特殊能力
・医療知識（傷の手当てが出来る。回復薬の効果２倍）
・お弁当（真心のこもったお弁当。食べると感激のあまり失神する）
・占い（的中率０％という脅威の的中率を誇る占い）

☆一之瀬ことみ／ウィザード
ＨＰＤ／ＡｔｋＥ／ＤｅｆＤ／ＩｎｔＡ／ＤｅｘＤ／ＳｐｄＥ
武器・ルシファースピア（柄の両端に三日月の様な刃と球型の鈍器が付いた星をも砕く槍）Ｓ
防具・聖なる黒いドレス（大人っぽいドレス。聖なる力で守られている）Ｂ
アクセ・バイオリン（使う人によっては、凶器にもなる楽器）
特殊能力
・博学（何でも知ってる。知ってることだけ知ってる）
・テレポート（師匠直伝の移動魔法。一度行った場所に皆を運べる）
・バイオリン演奏（そのあまりの素晴らしさに、聴く者には天国が見える）

最初のメンバーに加え、回復役として椋と、移動魔法の使えることみが加ってくれた事が心強い。
そしてもう一人……
「それと、後もう一人頼りになる助っ人を呼んでおる」

「助っ人？」
「おいおい、この僕が居るんだ。そんな物必要ないだろ？」
「是非よろしく頼む」
「岡崎、僕じゃ頼りないって言うのかよ！？」
「いや、もちろんお前の囮としての能力には期待してるぜ！」
「何だよそれ！？」
折角親指を立てて褒めてやったのに、春原は食い下がってくる。
何かウザくなってきたので殴って黙らせようかとも思ったが、その時現れた人間？に思わず目を奪われ、春原なんてどうでもよくなった。
何しろそいつは……。
「く、くまぁ！？」
遅れて気付いた春原が驚きの声をあげる。
そう、現れたそいつは明らかにくまだった。
背中に身の丈程の大剣を背負った、間抜けな顔をしたくまの着ぐるみだった。
「わぁ、可愛いくまさんです！」
えっ！？
「大っきなくまさん、とっても可愛いの」
なぬ！？
……女共には好評な様だった。
「この者は『森野くまさん』と言ってな。凄腕の剣士じゃ。この者も同行させるがよい」

☆森野くまさん／剣士
ＨＰＢ／ＡｔｋＳ／ＤｅｆＢ／ＩｎｔＢ／ＤｅｘＢ／ＳｐｄＳ
武器・エグゼキューショナーズソード（斬首刑用の巨大で残虐な両手剣）Ａ
防具・クマの着ぐるみ（防御魔法がかかっており、もこもこで衝撃も吸収出来る）Ｂ

特殊能力
・蹴り使い（武器だけでなく、蹴りでも戦える。出鱈目に強い）
・グラビティー（自分の周囲の重力を操る。出鱈目に強い）
・？？？（乙女の秘密だ）

「ぷっ、くくっ、岡崎、あのくま攻撃やスピードSなんだけど！あんなデカイ剣背負ってるからどんだけ強いんだと思ったら、とんだ見掛け倒しじゃん」
「アホか。あのSはお前のZと違って、スペシャル、ようはAより上って事だ」
「Aの上！？A～Eの五段階評価じゃないの！？」
「まあ、凄すぎて最早評価出来ぬレベルの事じゃな。ちなみにわしの知力もSじゃ」
「ええっ！？てっきりお子様だからバカだと思ってた……」
「……例え本当の五歳児だったとしても、お主よりは利口じゃがな」
「「「うんうん」」」
「みんなして頷くなよ！」
「ま、まあ、見た目はあれだが、実力はありそうだな。よろしく頼むぜ」
こくんとくまが頷き、七人目の仲間として森野くまさんが加わった。
正直、俺も春原じゃないが少々不安だ。
ステータスに間違いは無いだろうが、流石にあんな格好してちゃな……。
それと、苗字はともかく名前が『くまさん』なのか？
敬称つけると『くまさんさん』になるのか？
「ハグしてみたいの」
「あの……私もことみちゃんの次いいですか？」
「あ……じゃあ、私も……」

女共は嬉しそうにかわるがわるくまに抱きついていた。
中身むさい男かもしれんのに……いいのか？
そんな中、杏だけは輪から離れた所で妹達の様子をうかがいながら何かを考えている様だった。

＜＜地下一階＞＞

重厚な門を抜け地下へと続く薄暗く長い階段を抜けると、俺達はやたらと広い空間に出る。
「どうやら、ここが地下一階みたいだな」
「地下迷宮ってくらいだからもっと狭っ苦しい迷路だと思ってたけど、何にも無いね」
「昔正規軍が攻撃した際に、行軍し易いよう邪魔な壁は撤去されてるの」
「もはや迷宮でも何でも無いわね」
「まあ、楽でいいじゃん。とっとと次の階に行こうよ」
「……いや、どうやらそう簡単にはいかないみたいだぜ」
「そのようね……みんな、ここはもう敵地よ。気を引き締めなさい！」
俺と杏は気配を察知して武器を構える。
早速来たか……どうやら相当な数の獣人共に遠巻きに囲まれているみてえだ。
まあ、敵の巣窟なんだから当然か。
「隠れる所もねえし、正面からやるしかねえか」
「いきなり総力戦ね」
「ふふっ、ついにこの僕の実力を見せる時が来たようだね。渚ちゃんに椋ちゃん、ことみちゃん、君達は僕が守る！」
「よっし！じゃあ逝け春原！」

女の子が増えて張り切る春原のケツを、いつもの様に蹴っとばす。
「とっとっ、何すんだよ岡崎！？人が格好良く決めてる時に……って、ひいいいいいいいいっ！！」
狙い通り突出した春原に、獣人達が殺到する。
「今だ！みんな、一気に片をつけるぜ！」
俺達のダンジョン攻略が、今始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1460i/

Dungeons＆Takafumis＆CLANNADs

2010年10月9日19時51分発行